

『續修四庫全書總目提要』の価値

——『水滸傳』の解題を例に——

林 雅 清

はじめに

約十年前、中国齊魯書社より『續修四庫全書總目提要（稿本）』という影印本が出版された。手稿本と謄写本の影印が計三十七冊と、その索引が一冊の、全三十八冊である。一体なぜ、「總目提要」という工具書としての利用価値の高いものが、未校正かつ未分類のまま、「稿本」を影印するという形で出版されたのであろうか。結論からいうと、それは同書の学術的価値の高さからである。しかし、その「価値」は、まだまだ広くは認識されていないように見受けられる。中国文学関係の学術論著においても、同書に収められている解題が参考に挙げられているものは少ないのではなからうか。よって本稿では、中国文学、ひいては広く中国学を研究するに当たっての、「提要」の利用価値および『續修四庫全書總目提要』の学術的価値の再認識を促すため、筆者が利用するところの『水滸傳』の解題を一部例に取りながら、同書およびその関連書籍、そしてその他の「提要」類の分析を試みたい。

なお、「提要」とはそもそも中国語で、中国古典籍（漢籍）の解題、すなわち著者・内容・版本・体裁などに関する説明文のことであるが、その「提要」が付された漢籍分類目録の代表格といえば、『四庫全書總目』（別名『四庫全書總目提要』、略称『四庫提要』。以下、略称を用いる）である。さらに、この『四庫提要』は本稿で取り上げる『續修四庫全書總目提要』が生まれる基となった書物であるため、まずは『四庫提要』の概略から見えていくことにする。

一 『四庫提要』について

『四庫提要』は、清乾隆帝の勅命により紀昀（字は曉嵐）を中心として編纂された『四庫全書』の、所収書および存日書⁽¹⁾の「提要」を集めたものである。ただ、この『四庫全書』の「提要」は、単なる解題におわらず、内容の真偽を断じたり評価を下したりするなど書評的要素も含まれ、また、著者の思想や人となりの考証・評価、さらには批判までなされているものが多い。村越貴代美氏や孫言誠氏の指摘にもあるように、それは『四庫提要』の編纂目的が「採録した書物の著者や底本に対する綿密で実証的な検討と、著者の人物や著作に示された思想が天子の聖旨にかない国朝の諸賢に推奨するに足るか否かの判定⁽²⁾」というところにあったことによるものであるが、そこには、『四庫全書』の編纂委員であり『四庫提要』を執筆した紀昀をはじめとする四庫館臣たちの私見、そしてそれを包括する当時の為政者、すなわち清朝廷の「反清の闘志を削ぐ⁽³⁾とする意図」が、ありありと表れている。しかし、その「提要」の内容は、各書物に下された「正統」な評価として長年にわたって人々に認識されてきたのである。

『四庫提要』の価値基準がたとえ為政者側の政治的配慮に基づくものであるにせよ、また、考証の内容に誤謬が多く見られるにせよ、一万種を超える漢籍の概要とその著者の概略をつかむことができるばかりでなく、両者の当時に

おける位置付けが理解できるといふ点において、『四庫提要』はやはり学術的に価値の高い存在といえよう。⁽⁴⁾

ただ、惜しむらくは『四庫提要』から漏れた漢籍も乾隆年間以前のものだけで幾万点に上るといふ事実、とりわけ『水滸傳』をはじめとする白話文学作品や、仏教經典などが一点も著録されていないという点である。『四庫提要』に著録されていないということは、『四庫全書』に原文が収録されていないばかりでなく、その存目にすら書名が挙がっていないということである。これは、政治的理由により排除されたというよりも、むしろ当時はそれらに学術的価値が見出されていなかった、つまり、白話文学は「文学」と認識されておらず、仏教經典は外国の教えを記したもので保存重要度の低いものと判断された、ということが最大の理由ではなからうか。⁽⁵⁾

しかし、近代以降は白話文学も「文学」として認められ、通俗文学あるいは俗文学と呼ばれる元曲や明清小説も、れっきとした「漢籍」に含まれている。また、その古版本の多くは、中国では「善本」として貴重書扱いされている。仏教經典も然りである。このように、清朝以前における学問の「正統」が消えゆく現代において、『四庫提要』の欠を補う、そして『四庫提要』を質的にも量的にも大幅に上回る「提要」が編纂された。それが、『續修四庫全書總目提要』（別名『續修四庫全書總目』、『續修四庫全書提要』。略称『續修四庫提要』、『續修提要』。本稿では、以下『續修四庫提要』と記す）である。

二 『續修四庫提要』の成立過程

『續修四庫提要』の成立過程については、すでにいくつかの論考が世に問われているが、⁽⁶⁾『續修四庫提要』の実態の再認識を促すため、そして後に述べる『續修四庫全書』との違いを明確にするため、ここで改めて整理しておきた

い。

『續修四庫提要』の編纂事業は、清末の義和団事件（北清事変）に端を発する。一八九九年より華北一帯で起こった義和団による排外運動を鎮圧すべく、欧米列強に倣って軍を送った日本は、列強と共に清国より賠償金を受け取る契約を取り決める（義和団賠償金、中国名「庚子賠款」）。しかし、その後の辛亥革命や五四運動、第一次世界大戦の影響などにより賠償金の支払いは延期され続け、中国国内では賠償金の取り消しを要求する声が高まった。そこで日本政府は、先に米國が賠償金の支払いを免除し、それを資金として対華文化事業を行ったことに倣い、一九二三年三月に「対支文化事業特別會計法」を制定、翌月から義和団賠償金の一部を資金源とする「対支文化事業」を開始した。

同年末、外務省に設けられた同事業の諮問機関「対支文化事業調査會」の、「特別委員會」委員に選出された狩野直喜や服部宇之吉らは、同事業の一環として設立される「北平（現北京）人文科學研究所」における具体的事業として『四庫全書』の翻刻を提起したが、主に資金面の問題から政府側に容れられなかった。その後、「調査會」において数度の調整が行われ、一九二五年、日中兩國の研究者によって構成される「東方文化事業總委員會」が設置され、最終的に狩野の調整案としての「四庫全書補遺及四庫全書續篇事業予算」が通り、『四庫全書』の「續修」事業が開始される。

まず着手されたのが、「續修」『四庫全書』に収める図書の選定と、その蒐集である。「人文科學研究所」所員に任命された狩野・安井小太郎・内藤湖南・江瀚・王式通・劉培極・戴錫章・江庸ら、日中兩國の学者によって選定された図書の一部は、新設された「東方文化事業圖書籌備處」に蒐集・保管され、そのほか北京地区の各図書館や博物館、「奉天圖書館」や「大連滿鉄圖書館」の蔵書、私蔵書や国外蔵書などから抄録した図書と併せて「提要」が編まれる

こととなるのであるが、一九二八年の日本軍第二次山東出兵による排日運動のあおりを受け、この事業は一時頓挫してしまふ。一九三一年になってようやく事業が再開され、「總委員會」委員長であり「人文科學研究所」総裁であった柯劭忞、図書選定に当たった江瀚・王式通らをはじめ、孫人和・譚其驥・趙萬里・謝国楨・傅惜華・孫楷第ら中国入学者たちの手によって、「提要」の作成が開始される。一九三八年には「人文科學研究所」内に「提要整理室」が設立され、順次作成された「提要」の整理、印刷が行われることとなる。当初の「提要」作成および整理事業は四年を期限とされていたものの、一九三七年に勃発した日中戦争の影響が甚大で、実際は終戦の一九四五年に至るまで「提要」の執筆は続けられた。なお、作成された「提要」の整理稿の一部一万余点は、京都の「東方文化研究所」（旧東方文化学院京都研究所、現京都大学人文科学研究所の一部）に送付されたという。しかし、「人文科學研究所」ないし「東方文化研究所」から、『續修四庫提要』が刊行されることはなかった。

結局、日中戦争の影響などによって「対支文化事業」そのものが挫折してしまい、『四庫全書』の「續修」、すなわち『續修四庫全書』の刊行はおろか、「提要」の翻刻・出版すら実現しなかった。そして、日本の敗戦と同時に「人文科學研究所」および「東方文化事業圖書籌備處」が所有していた資料はすべて国民政府に接收され、一九四九年十月の中華人民共和国成立後は、台湾の中央研究院歴史語言研究所傅斯年圖書館に移入された一部の図書を除いて、残りすべてが中國科學院圖書館に保管されている。

以上、『續修四庫提要』の成立過程が再確認できた段階で、次に現在刊行されている『續修四庫提要』および『續修四庫全書』の実態について紹介する。

三 『續修四庫提要』と『續修四庫全書』

現在、『續修四庫提要』と題する図書が三種、そして『續修四庫全書』と題する叢書が一種、刊行されている。

前者は、①『續修四庫全書提要』全十三冊（台灣商務印書館、一九七二）、②『續修四庫全書總目提要 經部』全二冊（中華書局、一九九三）、③『續修四庫全書總目提要（稿本）』全三十八冊（齊魯書社、一九九六―一九七）の三種で、その原稿はいずれも先述の「人文科學研究所」において作成されたものである。

①は、戦時中京都の「東方文化研究所」に送られた原稿を、平岡武夫氏が台湾の商務印書館に提供し、王雲五主編のもと四部分類によって排印、刊行されたものである。②は、中國科學院圖書館が「人文科學研究所」より受け継いだ資料に基づいて編纂、排印本として中華書局より出版したものである。これも四部分類によって整理されているが、①とはその分類法の詳細に多少の異同がある。③も、②と同じ資料により中國科學院圖書館が編集したものであるが、「稿本」の名のとおりに同圖書館が保管する原稿を著者別にそのまま影印したものであり、四部分類もされていない。

この三種の内、『續修四庫提要』の全貌がうかがえるのは、③のみである。①は遺漏が多く、文字や句読点にも誤りがある。例えば、經部の易類には、本来全部で六百三十九種の「提要」があるにもかかわらず百九十九種しか収録されていないなど、全体の三分の一程度しか見ることができず、また、誤植と思われる箇所も目立つ。②は原稿にはば忠実に翻刻し、遺漏なく収録しているというものの、「經部」しか刊行されておらず、残りの刊行の目処は立っていないらしい。中國科學院圖書館によれば、「史部」と「集部」の一部もすでに標点を付し整理済みとのことであるが、その段階で刊行に向けての作業が中断されたため、③の影印本が出版されたのだという。なお、中断の理由は明

らかにされていない。

その③『續修四庫全書總目提要(稿本)』にも、問題点はある。先述したように配列が四部分類ではなく、「提要」の執筆者ごとにまとめて配されている。ただし、すべての執筆者が一括にまとめられている訳ではなく、二冊以上に分かれて収録されているものも多い。しかも順不同である。第一冊巻頭の「前言」の後に「提要撰者表」があり、「王式通／第一冊第一葉上至第一冊第三十九葉上」というように、一応一覽になつてはいるが、これでは目的の「提要」を探すことはほとんど不可能に近い。よって、第三十八冊の「索引卷」から引く以外にない。ただ、三万点以上もの漢籍の解題を収録する『續修四庫提要』の全体が見られるのは、目下この③だけである。四部分類がなされておらず、執筆者によっては読みづらい部分も多々あるという難点を差し引いても、同書の価値は相当のものである。⁽⁸⁾

一方後者、すなわち現在刊行されている『續修四庫全書』全一千八百冊は、一九九五年中國出版工作者協會の提案により、上海圖書館の顧廷龍主編のもと深圳南山區人民政府および上海古籍出版社の出資により編纂、同出版社より出版されたものである。これは編纂過程からして、先の「人文科學研究所」による『四庫全書』の「續修」計画とは何の関係もなく、両者は全く別個のものである。つまり、現在刊行されている『續修四庫提要』は、現在刊行されている『續修四庫全書』所収書の「提要」ではない。いわば、『四庫提要』の「續修」なのである。

ところで、『四庫全書』の「續修」作業⁽⁹⁾については、光緒十五年(一八八九)の翰林院編修王懿榮の上奏や、一九一九年の金梁らによる『四庫全書』「存目」の「續修」の建議など、企画の段階では「対支文化事業」以前から幾度か提起されてきた。しかし、いずれも実現には至らなかった。ただ、その意志だけは時代を越えて受け継がれ、近年

の『續修四庫全書』出版に達した、という観点からすれば、現在刊行されている『續修四庫提要』と『續修四庫全書』両者の間に全く縁のないこととは言えないのかもしれない。

さて、その両者の収録書を比較してみると、前者は三万五千二百六十五部⁽¹⁰⁾、後者は五千二百二十二部と、前者は「提要」のみであるものの後者の六倍以上の書目を収録している。例えば『水滸傳』について見てみると、後者が『李卓吾先生批評忠義水滸傳』一百卷引首一卷（明容與堂刊本）一種だけ収録しているのに対して、前者は『忠義水滸傳』一百回（高陽李氏藏明刊本）、『李卓吾批評忠義水滸傳』一百卷（日本内閣文庫藏明容與堂刊本）、『金聖嘆評定水滸傳』七十五卷（明崇禎間貫華堂原刊本）、『殘本京本增補校正全像忠義水滸志傳評林』十八卷（日本内閣文庫藏明萬曆刊本）の四種の「提要」（いずれも孫楷第が作成）を著録している。ただ、「集部雜家類雜說之屬」に分類される明の許自昌の『樗齋漫錄』など、収録書数の少ない『續修四庫全書』にあつて、『續修四庫提要』には著録されていないという書物も存在する。

しかしながら、『四庫全書』所収書三千四百六十二部を、あるいはその存目書六千七百九十三部を合わせた一万二千五百五十五部を優に超える収録数を誇る両者とも、その価値は計り知れない。収録書数が五千種あまりの『續修四庫全書』にしても、本文全文を影印しているという事実を鑑みれば、決して『續修四庫提要』に見劣りするものではない。ただ、もしも世の情勢が許し、「人文科學研究所」が蒐集した書物が影印され「續修四庫全書」として刊行されていたならば、現在刊行されている『續修四庫全書』を大幅に上回る一大叢書となり、後の研究にさらに多大な恩恵をもたらしたであろうことは言を俟たない。

なお、『續修四庫全書』の「凡例」によれば、

本書は『四庫全書』の先例に従い、収録書すべてに「提要」を記す。また、各書の「提要」および各部類の「小序」を一冊にまとめて『續修四庫全書總目提要』とし、別冊として出版刊行する。なお、その編纂規定は本書の巻頭を参照されたい。⁽¹¹⁾

とあるが、仮にここでいう『續修四庫全書總目提要』が出版されれば、内容の全く異なる同名の書が存在することになる。ただ、『四庫全書』の先例に従い」とは謳っているものの、『續修四庫全書』には『四庫全書』のように「書前提要」が付されている訳ではないので、同書の出版は当面期待できないように思われる。

四 『續修四庫提要』における『水滸傳』の解題

ここで、『續修四庫提要』の内容面について、少し触れておきたい。といっても、ここではその「提要」すべてを概観することはせず、特に白話小説を代表する作品の一つである『水滸傳』の「提要」を取り上げ、その学術的価値について検討したいと思う。

『續修四庫提要』に取られている『水滸傳』の版本は、前章で紹介したように『忠義水滸傳』、『李卓吾批評忠義水滸傳』、『金聖嘆評定水滸傳』、『殘本京本増補校正全像忠義水滸志傳評林』の四種である。この内、前二者が文繁事簡本と呼ばれる百回本で、小説『水滸傳』の原型に最も近いと考えられている版本である。ちなみに、『金聖嘆評定水滸傳』は、清の金聖嘆が文繁事繁本(百二十回本)の第七十二回以降を削除し、大幅な改訂を加えて出版したいわゆる「金聖嘆本」で、最後の『殘本京本増補校正全像忠義水滸志傳評林』は文簡事繁本の一種である。

さて、『續修四庫提要』における『水滸傳』関連最初の解題、すなわち『忠義水滸傳』の「提要」では、当テキストの書誌学的説明の後に、『水滸傳』自体の版本の問題について、四つの方面から詳細な解説および考証がなされている。以下、その概要を紹介しておく。

一、『水滸傳』は羅貫中の作と言われるが、『水滸傳』本文に「書会」という言葉がよく出てくることなどから、羅貫中は「書会」の人間であった、あるいは羅貫中が「書会」で編纂されたテキストを用いて『水滸傳』としてまとめた、という可能性がある。

二、『水滸傳』百回本（文繁事簡本）には「征遼故事」があつて「征田虎王慶故事」がなく、百十五回本などの文簡本諸本や楊定見本（百二十回本、文繁事繁本）では「征遼故事」・「征田虎王慶故事」の両方がある。「征遼故事」と「征田虎王慶故事」の文章は同じく粗雑であるが、百回本の第七十二回に「四大寇」のことが書かれてあり、そこには「田虎」・「王慶」の名が見える。名があるということは、その物語も古本にあったということになる。とすれば、「征田虎王慶故事」は文簡本の創作によるものはない。パリ所蔵本の題に「挿増田虎王慶」とあるのは、「新刊の百回本にはない」ということであり、「古本より増やした」と言っているのではない。したがって、「征遼故事」も郭勳本（百回本）から付加されたと言うことができ、楊定見本の序文にある「郭武定本は征田虎王慶故事を削除して征遼故事を挿増した。事実、つまらぬ作家はそれを真似、大家はそれに従わなかった」という説は正しいということになる。

三、「水滸」物語は、宋・元代の詞話や説唱の形態として成立し、それが散文となって小説の形になったと考えられ

る。例えば、百回本第四十八回で祝家莊を讃える詞の終わりにある「水滸を平らげ晁蓋捕らえ、梁山破って宋江生け捕る」などの句は、説唱形式の名残と言える。

四、百回本『水滸傳』の梁山泊物語は、宋末の『宣和遺事』や元雜劇（水滸劇）の叙述と同じという訳ではない。例えば、宋江は『宣和遺事』では閻婆惜を殺めてすぐに梁山泊に入るが、『水滸傳』では江州で処刑場から奪取されてのち梁山入りするし、晁蓋は元曲では三度目に祝家莊を攻めた時に死ぬというのが多いが、『水滸傳』では曾頭市を攻めた時に死ぬ。また、三十六人の好漢の名前や席次が、『宣和遺事』や『癸辛雜識』、周憲王の「豹子和尚」劇などと出入りがある。しかし、「武松打虎」や「張順水裏報冤」、「李逵元夜鬧東京」など『宣和遺事』にない物語が元曲中に存在するし、董平の綽名「雙鎗將」は『水滸傳』以前の物語では「一直撞」となっているが、百回本の第七十八回に「董平は先陣を切るのが得意で、人から董一撞と呼ばれている」というような表現が出てくる。すなわち、『宣和遺事』、元曲、『水滸傳』と、異なる中にもやはり通じる点が存在するということがある。⁽¹²⁾

一つ目は『水滸傳』の作者に関する考察、これは現在においてもなお議論の続いている問題である。施耐庵や羅貫中などの名は挙がるものの、現在では『水滸傳』は複数の人間によって書かれたという説が有力である。この「提要」にあるように、それが「書会」の人間であった可能性は充分にあると思われる。

三つ目と四つ目は「水滸」物語の源流に関する考察で、『水滸傳』と説唱との関連性、あるいは『水滸傳』と『宣和遺事』・元曲との異同について述べられている。これらの指摘は、現在の定説にも通じるものである。

問題は二つ目である。この「提要」の作者孫楷第は、『水滸傳』における「征遼故事」部分と「征田虎王慶故事」部分の文体は「同じく粗雑である」と認識しているものの、両部分いずれも「古本」にあったものと想定している。その根拠として、百回本の第七十二回に「田虎」と「王慶」の名があることを挙げているが、「名があるということ」が「その物語も古本にあったということ」にはならないのではなからうか。この点について、現在では少なくとも「征田虎王慶故事」部分は文簡本においてはじめて挿増されたと考えられており、「征遼故事」部分の成立も、ほかの部分の成立よりも時期が下ると考えられている。ただ、現在、最も「古本」の形態に近いと考えられている版本は百回本であり、「征遼故事」部分のない古版本は現存していないため、版本学的に判断するすべはない。

このように、現在における定説とは異なる点はあるものの、その実証的考察は充分参考に値するものである。また、次の『李卓吾批評忠義水滸傳』の「提要」では鐘敬伯本・英雄譜本との校勘が、『金聖嘆評定水滸傳』の「提要」では楊定見本との校勘が、そして『殘本京本増補校正全像忠義水滸志傳評林』の「提要」では百回本との詳細な校勘がなされており、いずれも一千字前後あるというその分量からしても、単なる「解題」とは言えないほどの内容となっている。

ここでは『水滸傳』の「提要」のみを見てきたが、その他の「提要」も同様、書誌学的考察に力が注がれているというのが、この『續修四庫提要』の大きな特徴でもある。

五 『續修四庫提要』以降の「提要」における『水滸傳』の解題

次に、『續修四庫提要』の『水滸傳』に関する記述をほかの「提要」の類と比較するため、『續修四庫提要』以外の

「書目」および「提要」を紹介しておく。

前章で紹介した『續修四庫提要』における『水滸傳』の「提要」の作者孫楷第は、同時期に『中國通俗小説書目』（一九三二年、北京圖書館中國大辭典編纂處より刊行）を著している。同書は「書目」であるが、収録書によっては簡単な解題も付されている。特に、四大奇書など版本の複數存在する書については、まずその書の総解題があり、後に佚書も含めた版本別の紹介がなされている。

同書に掲載されている『水滸傳』の版本は、『舊本羅貫中水滸傳』二十卷（『也是園目』著録）、『忠義水滸傳』一百卷（『百川書志』著録）、『都察院刊本水滸傳』（『古今書刻』著録）、『郭勳刊水滸傳』（『寶文堂目』著録）（以上古佚本）、『忠義水滸傳』（明嘉靖間刊本、存第十一卷第五十一至第五十五回）、『天都外臣序本水滸傳』一百卷二百回（明翻嘉靖本）、『忠義水滸傳』一百回不分卷（李玄伯藏明刻本）、『李卓吾先生批評忠義水滸傳』一百卷二百回（明容與堂刊本）、『芥子園本李卓吾評忠義水滸傳』一百回（李玄伯藏本）、『鐘伯敬先生批評忠義水滸傳』一百卷一百回（明季刊本）、『新刊京本全像插增田虎王慶忠義水滸全傳』（巴黎國家圖書館藏明刊本）、『京本增補校正全像忠義水滸志傳評林』二十五卷（日本日光晃山慈眼堂藏明余氏雙峯堂刊本）、『溫陵鄭大郁序本水滸傳』一百十五回（黎光堂本、佚）、『明刊巾箱水滸傳』一百十五回（佚）、『新刻出像京本忠義水滸傳』十卷一百十五回（清金陵德聚堂刊本）、『水滸傳』二十卷一百十回（明英雄飛館合刻『英雄譜』本）、『文杏堂批評水滸傳』三十卷不分回（寶翰樓刊本）、『水滸全傳』十二卷一百二十四回（坊刊本）、『李卓吾評忠義水滸全傳』一百二十回不分卷（明袁無涯原刊本）、『金人瑞刪定水滸傳』七十回（明崇禎舊刊貫華堂大字本）の二十種である。⁽¹³⁾これは、『續修四庫提要』に収録されている『水滸傳』の版本の五倍に相当する。

このように、『中國通俗小説書目』は中國古典小説各書の版本の種類を知る上では極めて有用な解題目録であるし、その内容は現在認識されている各版本に通じる面も多いが、それぞれの解題の量としては『續修四庫提要』の比ではないし、そこで考証されている版本の問題なども、やはり『續修四庫提要』の詳細さには及ばない。

その他、『水滸傳』をはじめとする通俗小説の「提要」が見られるもので現在刊行されている書目としては、④『中國通俗小説總目提要』（中國文聯出版公司、一九九〇）、⑤『中國古代小説總目』全三冊（山西教育出版社、二〇〇四）、⑥『中國古代小説總目提要』（人民文學出版社、二〇〇五）などが挙げられる。⁽¹⁴⁾

④は、一九八四年に江蘇省社會科學院文學研究所において編纂が企画され、同所と一九八七年同院に新設された明清小説研究中心との共同編纂に係るものである。唐代から清末（一九一一年末）までの通俗白話小説千百六十種（一部文言小説も含まれる）を成立順に収録しており、まず著者と各版本の紹介、そして内容の「提要」、最後に「回目」すなわち各回の目次が載せられている。『續修四庫提要』と異なるのは、例えば『水滸傳』は「水滸傳（一名《京本忠義傳》）」、『三國志演義』は「三國志演義」と、各項目の表題には通称としての書名が挙げられ、『忠義水滸傳』や『三國志通俗演義』などといった各版本の正式な書名は、「提要」の中でそれぞれ紹介されているという点である。なお、「提要」の内容として、特に版本の問題に関しては、『續修四庫提要』のように踏み込んだ考証はあまりなされていないが、現存する版本の種類とその関係については一通り紹介されている。さらに物語の内容の概括がなされている点などを勘案すれば、やはり有用というべきであろう。また、佚書や未見書についても簡単な紹介がなされているため、「書目」としては充分有用である。

⑥の編纂は、一九九三年北京で開催された「中國古代小説國際討論會」において提唱され、一九九六年より大陸・

台湾・日本・シンガポール・フランスの研究者で構成される同編撰委員会（石昌渝主編）によって、先の『中國通俗小説書目』と①、そして寧稼雨『中國文言小説總目提要』（齊魯書社、一九九六）などを受けて編纂されたものである。同書は白話卷・文言卷・索引卷の三卷からなり、「提要」は書名拼音順に合計千二百五十一種収録、索引は語彙索引で「提要」本文中に出てくる書名や人名、地名、年号などを取っている。「提要」の体裁としては、①とは逆に先に内容の紹介とその文学的価値などについて述べられ、後に版本の紹介とその考証がなされている。なお、『水滸傳』の「提要」に関していえば、後半には各版本の序文が引用されており、「提要」の分量としては①や『續修四庫提要』の数倍に当たる。また、その内容の紹介は「《水滸全傳》描写了北宋末年政治腐敗、奸佞弄权、社会黑暗、民不聊生……（『水滸全傳』は、北宋末に政治が腐敗し、奸臣が権勢を振るい、社会が暗闇に包まれ、人々が安心して生活ができなくなり……ということを描写している）」に始まり、「深刻提示出“乱自上作”、“官逼民反”、“罪在朝廷”、是促成当时社会民众起义的重要原因。（「世の乱れは上から」、「官の圧迫厳しくて民反す」、「罪は朝廷にあり」ということが当時の社会における民衆蜂起を促す重要な原因であるということを示している）」などと、幾分政治的ニュアンスもないではないが、『四庫提要』ほどの意図は感じられない。

◎は朱一玄・寧稼雨・陳桂聲の編著になるものであるが、編纂開始年月は不明である。朱一玄の「前言」の署名の下に「一九九四年六月」とあるので、それ以前であることは確かである。収録されている書は先秦から清末までの文言小説（上編）と白話小説（下編）、合わせて二千百九十二種の「提要」（各編時代順）であるが、その内容は至って簡素、特に版本の問題に関してはほとんど触れられていない。収録数は三者の内最多であるが、内容は専門家向けではないように思われる。先の二者は孫楷第の『中國通俗小説書目』を受けたもの、特に②は①の内容なども踏まえて

編纂されたものであるのに対し、この◎はその「前言」においても全く先の二者に触れられていないばかりか、『中國通俗小説書目』についてすらも言及されていない。もはや『續修四庫提要』に比べるまでもない。

おわりに

以上、『續修四庫提要』の価値について、その体裁や成立過程から、「提要」の内容、そしてその他の「提要」類との比較に至るまでを、『水滸傳』の解題などを例に挙げながら検証してきた。

成立当時の学問体系や思想、政治的要素などを探るといふ点においては、その価値は『四庫提要』ほどには見出されないかもしれない。しかし、その「提要」が単なる解題に終わらず、綿密な書誌学的考証、あるいは版本間の校勘などがなされている『續修四庫提要』の学術的価値は、決して『四庫提要』に劣るものではないと考えられる。ただ、『四庫提要』の内容にも注意すべき点が多分に含まれるように、『續修四庫提要』の内容にも問題点はある。第四章で見てきたように、例えば『水滸傳』に関しては、その物語の成立過程、あるいは古版本の認定などの点で、その後の研究により、『續修四庫提要』の記述の内容が旧説・異説となってしまう側面もある。しかし、その旧説・異説ですら、完全に否定されるような確固たる論証が挙げられている訳ではない。すなわち、その旧説・異説に相当する箇所も、一視点として参考にすべき内容なのである。

戦時中という最悪の状況下において編纂され続けた、「提要」としては他書の追隨を許さない圧倒的収録数とその質を誇るこの『續修四庫提要』の恩恵が、近年の影印本の出版によって容易に享受できるようになったということは、利用する上ではまだ不便な点も残されているものの、我々中国学に身を置くものにとって幸いなことである。特に、

『四庫提要』には取られていない「俗文学」などを研究するに当たっては、経書や文言文などを研究する際に一度は『四庫提要』に目を通すように、この『續修四庫提要』の「提要」を参考にすべきではなからうか。

最後に、『續修四庫提要』の利用価値が一層上がるために今後は是非とも必要であると思われる点を、三つ挙げておく。

一点目は、『續修四庫提要』の稿本を再整理し、四部分類に再編して排印本として出版（あるいは中華書局の『續修四庫全書總目提要 經部』の続編が出版）されること。⁽¹⁵⁾そこに語彙索引が付録されればなお良い。

二点目は、以後の研究によって明らかになった点の改正を含めた、「提要」の再校訂が行われること。『四庫提要』については、余嘉錫の『四庫提要辨證』や胡玉縉・王欣夫の『四庫全書總目提要補正』など、いくつかの補編が刊行されているが、『續修四庫提要』の補編はまだ編まれていない。

三点目は、翻訳が出版されること。これも、『四庫提要』の「提要」の一部に関しては、すでに訳注が世に問われているが、『續修四庫提要』の訳注はまだ出されていない。『續修四庫提要』の学術的価値は、『四庫提要』に劣るものではない。それが、我が国において、中国語を解する中国学研究者だけではなく、中国語を解さない他分野の研究者、あるいは一般読者も参考にできるよう、正確かつ平易な日本語訳が出されてこそ、学術的価値の高い『續修四庫提要』が、より利用価値のあるものとして認識されるようになるのではなからうか。むろん、日本語訳のみならず、他国においてもそれぞれ翻訳が出版されれば、その価値認識は各国各分野に広まることであろう。

- (1) 『四庫全書』の「存目」については、季羨林・任繼愈・劉俊文「四庫存目と『四庫全書存目叢書』」(『汲古』第二十七号、一九九五) 参照。
- (2) 村越貴代美『四庫全書』の解題——朱淑真『断腸集』『断腸詞』の「提要」を例に(『図書館情報大学研究報告』第十四卷一号、一九九五)。なお、当村越論文では、中国における「解題としての「提要」の在り方」は「書名・篇数または巻数・篇目、本文の校訂の過程、著者の経歴・思想、篇名や書名の由来、書物の内容とそれに対する批評、書物の真偽、価値などが述べられ、さらに学問の系統や思想の是非にまで踏み込んで議論」している前漢劉向の「叙録」より始まるとし、『四庫全書』の「提要」がはじめ著録書の各書前に付され、後に「提要」だけにまとめられた」のも、「劉向の「叙録」に倣ったもの」であると解説している。
- (3) 孫言誠「数十年来埋もれたままの磨かれざる玉(上)——「続修四庫全書総目提要稿本」」(『東方』第一八九号、一九九六)。なお、『四庫提要』の編纂意図については、村越前掲論文・孫前掲論文のほか、村越貴代美「中国の書目における学術の反映の一例——『四庫全書総目』集部の詞曲類設置について——」(『図書館情報大学研究報告』第一三卷一号、一九九四)、王標「十八世紀中国知識人の華夷観——『四庫提要』を中心に——」(『中國學志』豫号(第十六号)、二〇〇一) など参照。
- (4) 学術的価値が高いとはいえ、『四庫全書』および『四庫提要』の記載内容を妄信する行為は、その後の学問研究に多大な悪影響を及ぼすことになりかねない。その一例を、森瀬壽三先生が「李白「静夜思」その後」(『關西大學中國文學會紀要』第二十七号、二〇〇六)の中で示されているので参照されたい。また、『四庫全書』は版本上の問題が多いこと知られる。よって、古文献を扱う際に『四庫全書』本を底本とすることは極力避けるべきである。
- (5) なぜなら、例えば宋の王柏の『詩疑』・『書疑』、明の王洙の『宋史質』や李贄の『李温陵集』・『藏書』などのように、おそらく学術的価値があると認められた書物に関しては、たとえその内容が当時の政治理念にそぐわない、あるいはその著者の思想が危険であると認定されたものであっても、「存目」にその名が挙げられ、「提要」に批判的見解が述べられているものが多いからである。

(6) 『續修四庫提要』の編纂の経緯ないし趣旨については、『續修四庫全書總目提要(稿本)』(齊魯書社、一九九六—一九七)

「前言」のほか、今村与志雄「『統修四庫全書提要』と影印本『文字同盟』第三卷「解題」補遺」(『汲古』第二十三号、一九九三)、小黒浩司「統修四庫提要纂修考」(内山知也博士古稀記念会編『中国文人論集』、明治書院、一九九七)、孫言誠「数十年來埋もれたままの磨かれざる玉(中)」——「統修四庫全書總目提要稿本」(『東方』第一九〇号、一九九七)、山根幸夫「『統修四庫全書總目提要』と『統修四庫全書』」(『汲古』第三十六号、一九九九)、李常慶「『四庫全書』の統修をめぐる歴史的展開に関する一考察」(『日本図書館情報学会誌』Vol. 51, No. 4, 1100-1105)など参照。また、中国における『續修四庫提要』の研究には、郭永芳「『續修四庫提要』纂修考略——『續修四庫提要』專題研究之一——」(『圖書情報工作』一九八二年第五期)、郭永芳「『續修四庫提要』原稿辨誤舉要——『續修四庫提要』專題研究之二——」(『圖書情報工作』一九八三年第六期)、曹書傑「『續修四庫全書提要』及其功過得失」(『古籍整理研究學刊』一九八五年第三期)、羅琳「『續修四庫全書總目提要』的版本著録特点」(『古籍整理與研究』一九八七年第一期)、馮惠民「談談『續修四庫全書總目提要』」(『文史知識』一九八七年第二期)、郭永芳「『續修四庫全書總目提要』的整理方法與評價」(『圖書情報工作』一九八八年第四期)、羅琳「『續修四庫全書總目提要』編纂史紀要」(『圖書情報工作』一九九四年第一期)、彭明哲「『續修四庫全書總目提要』考略」(『湘潭大學社會科學學報』一九九四年第二期)、張蘭英「『四庫全書』及『續修四庫全書總目』著録書目統計」(『雁北師範學院學報』一九九五年第二期)、李海「『續修四庫全書總目』著録書目統計」(『晉圖學刊』一九九六年第二期)などがある。

(7) 「対支文化事業」の主な専著としては、王樹槐「庚子賠款」(中央研究院近代史研究所、一九七四)、山根幸夫「近代日中関係の研究——対華文化事業を中心として」(東京女子大学東洋史研究室、一九八〇)、黄福慶「近代日本在華文化及社会事業之研究」(中央研究院近代史研究所、一九八二)、阿部洋「『対支文化事業』の研究——戦前期日中教育文化交流の展開と挫折——」(汲古書院、二〇〇四)などがある。

(8) 以上、現在刊行されている『續修四庫提要』三種の関係については、各書の「序」・「前言」・「整理説明」および山根前掲論文、孫言誠「数十年來埋もれたままの磨かれざる玉(下)」——「統修四庫全書總目提要稿本」(『東方』第一九一号、一九九七)など参照。

(9) 『四庫全書』の「續修」を広義に解釈すれば、『四庫全書存目叢書』や『四庫全書存目叢書補編』、『四庫禁燬書叢刊』、『四庫未収書輯刊』など、いわゆる『四庫全書』関連叢書すべてが含まれるが、ここでは『續修四庫全書』としての刊行

を目的とする作業を指す。なお、『續修四庫全書』およびその他の『四庫全書』関連叢書に関しては、山根前掲論文ほか、吾妻重二『統修四庫全書』と四庫関連叢書（『関西大学図書館フォーラム』第九号、二〇〇四）、李常慶「1990年代における四庫全書関連叢書の刊行およびその文化的意味」（『日本図書館情報学会誌』Vol. 52, No. 1, 二〇〇六）などに詳しい。

(10) 一部重複しているもの、また散逸したものも含む。詳細は今村前掲論文参照。

(11) 原文は、「本書遵循《四庫全書》成例、爲入選各書一一撰寫提要。各書提要及各部類小序總彙爲《續修四庫全書總目提要》一書、另册出版發行。其編撰細則詳見該書卷首」。

(12) 該当箇所を以下に引用しておく。「一、水滸傳稱羅貫中作、明本署題尚多存其名。其人見於録鬼續簿、固實有。然今百回本則每稱書會、如第四十六回稱書會們備知此事作臨江仙詞、第九十四回稱先人書會留傳。一個個都要說到、則固書會編本、然謂貫中即書會中人。（按宋元文士多入社會。）或貫中用書會之本、亦無不可、此其一也。二、征遼事與征田虎王慶事、諸本或棄或取、頗不一致。如百回本有征遼無征田王、百十五回諸簡本、則有征遼亦征田王、楊定見本從簡本。其凡例云郭武定本去王田而增征遼、實是小家照應之法、大家正不爾。今按征遼征田王之文同屬荒率。然今百回本七十二回記四大寇、明有田虎王慶。其人名既見於本書、其事或亦載于古本。則田王之事殆非簡本臆增。其巴黎藏閩本題插增田虎王慶者、乃謂新行百回本所無、非謂增古本也。以是而言則征遼事殆為郭勲本所增出。楊氏之言乃道其實歟。此其二也。三、宋元詞話乃說唱之體、水滸既成于元。（按書中每稱故宋云云。）疑其本當為詞話、然今行諸本概是說散。唯其歌詞仍間存于本文中、如百回本四十八回有讚祝家莊詞一章、凡七言十八句、其結句云、填平水泊擒晁蓋、踏破梁山捉宋江。核其文實為偈讚之詞、則水滸古傳當為說唱本殆無可疑也。此其三也。四、據百回本所記梁山濼故事、與宋末宣和遺事不盡同、與元雜劇實白所述亦不盡同。如宣和遺事謂宋江殺閻婆惜即入梁山、水滸云江州劫法場後入梁山、元人曲多謂晁蓋三打祝家莊身亡、水滸云打曾頭市身亡之類。其三十六人名號次序、與宣和遺事癸辛雜識周憲王豹子和尚劇皆有出入、如李俊作李海之類。知其故事緣時代而有變易、今之水滸乃明人最後編定之本。然如武松打虎、張順水裏報冤、李逵元夜鬧東京之類、為宣和遺事所不載者、元人曲皆曾演之。見于録鬼簿太和正音譜野獲編等書、則沿波仍可溯其源。董平號雙鎗將、與舊說作一直撞不同。然百回本七十八回仍有董平慣衝頭陣、人稱董一撞之語、則於異中亦可見其同。此其四也。」
 底本は齊魯書社『續修四庫全書總目提要（稿本）』。丸括弧内は原文小字双行の割注。字体および読点の位置はほぼ原文に従い、句読点の弁別は筆者が

行った。なお、台湾商務印書館翻刻の『續修四庫全書提要』では、原文中「楊定見本」の「楊」が「陽」に、「梁山灤」の「灤」が「樂」に、「雙鎗將」の「鎗」が「館」に、それぞれ誤植されている。また、読点の位置の異同も数箇所見られる。

(13) 以上、ここでの書名・版本名等の表記は、孫楷第『中國通俗小説書目』（作家出版社、一九五七）に拠った。

(14) 「提要」ではないが、先の孫楷第『中國通俗小説書目』の補編として、大塚秀高『中國通俗小説書目改訂稿（初稿）』（汲古書院、一九八四）および同『増補版中國通俗小説書目』（汲古書院、一九八七）がある。

(15) 楊琳『古典文献及其利用』（北京大學出版社、二〇〇四）の「8.4『續修四庫全書總目提要』の項（二二九頁）によれば、現在、呉格氏（復旦大學中國古代文學研究センター教授・同圖書館古籍部主任）を主編として、この『續修四庫提要』の分類整理と標点作業が進行中で、近く逐次出版されるという。

なお、本稿は二〇〇六年度中国留学（復旦大學）における研究成果の一部である。